

認証評価の見直しの動向と 大学の内部質保証システムの充実

公益財団法人 大学基準協会
事務局長 兼 大学評価・研究部長
工 藤 潤
j_kudo@juaa.or.jp

Japan University Accreditation Association

1

CONTENTS



- 第1 サイクル認証評価で顕在化した課題
- 第2 サイクル認証評価から見える内部質保証システムの実態
- 内部質保証システムの構築に必要な条件
- 内部質保証システムの体系
- 質文化の形成

第1サイクル認証評価で顕在化した課題

- 大学内の教育改善メカニズムが機能していない。
 - 自己点検・評価の方法・体制・結果の活用などが不十分
 - 大学基準協会による第1期認証評価 324大学
 - 総評（約180大学）、助言（58大学）、勧告（10大学）
 - 自己点検・評価が
 - 法的義務の履行にとどまっている。
 - 恒常的な教育の改善、大学改革と連動するものとなっていない。
 - 実質化されていない。

Japan University Accreditation Association

内部質保証システムの実態

- 第2サイクル認証評価結果にみる各大学の内部質保証システムの現状

年度	平成23年度	平成24年度
提言の種類		
長所	2	3
努力課題または改善勧告	11	11
何れの提言もない	17	16
計	30	30

改善勧告（例）

重大な問題が相当数あるにもかかわらず、大学としての教育・研究水準を維持・向上させるための組織的および恒常的な自己点検・評価活動が十分とはいいがたく、改善・改革に取り組むためのシステムと体制が構築されているとは認められない。今後、PDCAサイクルをまわし、内部質保証システムを構築するために、改善につながる継続的・実質的な取り組みとなるよう早急に是正されたい。

大学に求められる内部質保証システム

- 「質保証に対する第一責任は、大学自身にある。」とする国際的共通理解。
- 教育の質の保証に自主的、自律的に取り組むこと、内部質保証システムの構築が必要。
- 内部質保証システムとは
 - PDCAサイクル等の方法を適切に機能させることによって、質の向上を図り、教育・学習その他サービスが一定水準にあることを大学自らの責任で説明・証明していく学内の恒常的・継続的プロセス。（『大学評価ハンドブック』（大学基準協会））
- 内部質保証システムの3つのキーワード
 - 質の向上、説明責任、恒常的・継続的プロセス

第2期の認証評価の目指す方向 ー 内部質保証システムと達成度評価 ー

- オーディット
 - イギリスQAAのInstitutional audit
 - システムの評価
- システムを構成する各要素の適切性・妥当性の検証は？
 - 教育課程、教育方法、学習成果などの具体的教育の中身までは評価しない。分野別の評価は、基本的に大学自身が担う。
 - 学外者の「目」を入れる（学外者の検証、プログラム・レビューなど）。
- 企業に対する監査（オーディット）とは異なる。
 - 内部質保証システムを通じて、大学教育の質の向上を図っているか。
 - 改善システム（学外者の検証も含む。）を通じて、目的・目標の達成に向けてどのような努力を行っているか、また、どれだけ達成しているか（達成度評価）。
- 内部質保証システムの有効性と達成度評価により、教育の個々の要素を間接的に評価

内部質保証システムの責任体制

- 質保証に責任を負う組織の明確化と、システムを動かす部局の設置（明確化）
 - 質保証システム全体に責任を負う組織 – 既存の組織を活用するか、新たに整備するかは、大学の判断
 - 例えば、「質保証・質向上委員会」
 - 内部質保証システムを掌る組織の責任と権限の明確化
 - 同組織を支える事務局機能の確立（部局の設置）
 - 内部質保証に関する方針の策定と手続きの整備（規程化）
 - 自己点検・評価などの検証結果を改善にフィードバックさせる仕組みの整備

内部質保証の対象 – 重要な3つの側面 –

- 内部質保証を3つの側面から捉える
 - 授業レベル（class level）
 - 教育プログラムレベル（program level）
 - 機関（大学全体）レベル（institutional level）

 - それぞれのレベルの質に責任を負う主体が異なる。
 - 点検・評価の観点が異なる。特に、学習成果の検証において、授業レベルでは主として学生個人が、教育プログラムレベルでは主として学生集団が、対象となる。
 - 「教育の現場」の質の保証・向上が重要。

学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の 明確化と構成員による共有

■ 学位授与方針（DP）の設定

- 4年間の学士課程教育を通じて修得が期待される知識・能力・技能といった学習成果を明示する。
- 例えば、学士力（知識・理解、汎用的技能、態度・志向性、統合的な学習経験と創造的思考力）

■ 教育課程の編成・実施方針（CP）の設定

- 学位授与方針に明示された学習成果を修得させるための教育課程をどのように体系的に編成するか、また、効果的教育方法をどのように取り入れるか、体系的教育課程に基づいて教員間の連携・協力をどのように図るか、などを明示する。

■ 学位授与方針（DP）と教育課程の編成・実施方針（CP）を大学構成員が共有する。

検証システムの確立と学外者の参画（1）

■ 検証システムを構築するにあたり、3つの側面（授業レベル、教育プログラムレベル、機関（大学全体）レベル）から行うことが重要である。

■ 授業レベル

- 個々の授業の内容・方法の有効性の検証を行う。そのために教員自身による自己点検・評価が重要。
- シラバスと授業内容の整合性、単位の実質化、厳格な成績評価、学生の学習達成度等が対象。
- 授業評価アンケート結果、F Dの活動内容などを活用する。

検証システムの確立と学外者の参画 (2)

■ 教育プログラムレベル

- 教育プログラムの有効性の検証。
- 各学部・研究科単位での自己点検・評価の実施。
- 学位授与方針や教育課程編成・実施方針の適切性、教育課程編成・実施方針に基づくカリキュラム編成とその体系性、カリキュラムの社会的ニーズの適合性、教育方法、学習成果、学習支援、教員組織などが対象。
- 教員自身による自己点検・評価結果に加えて、在学生や卒業生などに対する各種アンケート調査結果、ベンチマーク指標、FDの活動内容等を活用する。

検証システムの確立と学外者の参画 (3)

■ 機関（大学全体）レベル

- 大学全体に関わる事項の有効性の検証を行う。
 - 全学的観点から自己点検・評価を実施することが重要。
 - 大学全体の教育研究組織、管理運営組織、事務組織などの組織とその機能の有効性、社会貢献・社会連携、国際化等の大学全体にかかる取組みの有効性が対象。
 - 学生生活満足度調査結果、ベンチマーク指標などを活用する。
- 3つの側面からの点検・評価システムが個々バラバラに実施されるのではなく、全体として系統性を持って実施する。
- 各レベルの点検・評価が定性的、定量的データに基づくもの（エビデンス・ベースド・エバリュエーション）であること。

検証システムの確立と学外者の参画 (4)

■ 学外者の参画

- 大学全体、教育プログラムレベルでは、自己点検・評価のより客観性・妥当性を担保する観点から、自己点検・評価結果に対して定期的（例えば7年周期）に学外者による検証を加えることが重要である。
- 米国、英国の例
- 授業レベルでは、教員同士の授業参観などを取り入れる。

学習成果の測定方法(例)

直接的

国家試験合格率、資格試験合格率
など

学習成果に応じた検証方法の開発
・小論文
・プレゼンテーション
・グループ・ワーク
・ラーニング・ポートフォリオ
TOEFL、TOEIC
など

学生集団

学生個人

学生調査
・ NSSE (National Survey of Student Engagement)
卒業生就職先に対するアンケート調査

卒業時の学生(小集団も含む)
に対するインタビュー
授業評価アンケート

間接的

自己点検・評価結果の活用システムの構築

- 自己点検・評価等の検証結果が、大学、教育プログラムさらには授業の改善に結びつく仕組みを構築する。
 - 3つのレベルでの自己点検・評価結果、学外者による検証結果等が、内部質保証に責任を負う組織に報告。
 - 同組織は、各学部・研究科に対して、自己点検・評価結果や学外者による検証結果などを踏まえた中期的な戦略計画、行動計画等の策定を求める。
 - 各学部・研究科は、その戦略計画等に基づいて改革を進め、その進捗を年次報告の形で同組織に報告。

- 自己点検・評価等の検証結果を改善に連動させ質の向上を図ることが、内部質保証システムの機能を高める。

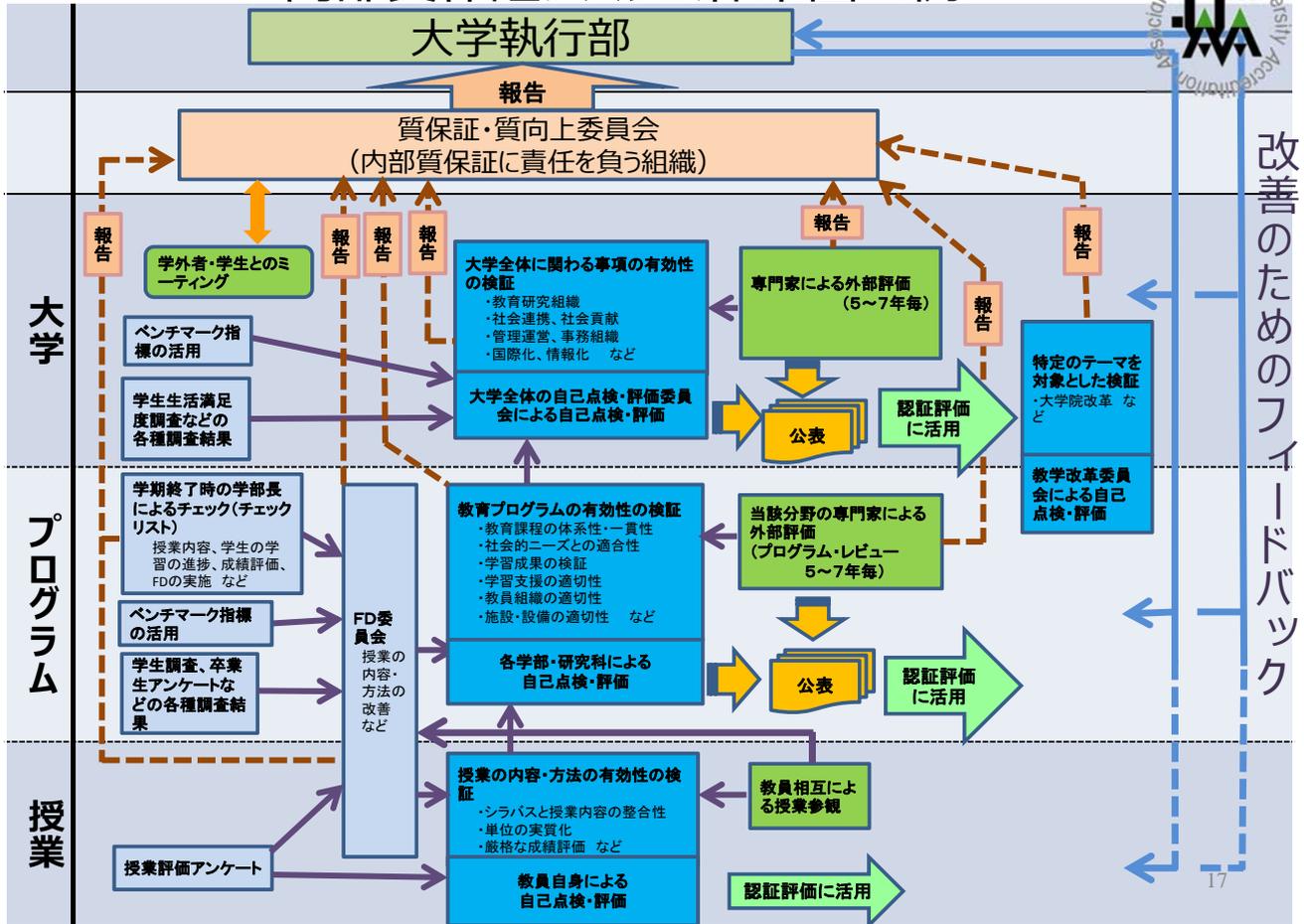
情報公開の推進

- 大学は、教育情報の公表を推進させる。

- 自己点検・評価や学外者による検証などの結果、こうした検証結果に基づく中期的アクションプランなどを公表。

- 自らの教育が一定水準にあること、大学及び大学教育の質の向上を目指して努力していることを説明・証明していくことが重要。

内部質保証システム体系図 <例>



質の文化の形成

- 質に対する学内構成員の意識を高める。
- 使命、目的、教育目標を明確化し共有する。
- 学生中心主義



- 質の保証・向上に主体性を発揮する。



- 内部質保証システムの構築こそ、大学に対する社会の信頼を確かなものにする。

ご清聴ありがとうございました



公益財団法人 大学基準協会
工藤 潤

Japan University Accreditation Association